
○議長（稲葉昭宏君） 休憩前に引き続き会議を開きます。

（午後 2時48分）

◇ 福 本 栄一郎 君

○議長（稲葉昭宏君） 一般質問を続けます。

通告順位 5 番、福本栄一郎君。

（2 番 福本栄一郎君 登壇）

○2 番（福本栄一郎君） 通告に従いまして、一般質問をただ今から行います。

私の質問は、第1次産業の振興。人材育成。特別職（副町長等）の選任についての3件であります。町民の安心・安全な生活を守るため、具体的かつ満足のいくわかりやすい明確な答弁をお願いいたします。

まず、第1次産業の振興についての1点目、町長は「第1次産業を土台としたグリーンツーリズムの推進」と述べておりますが、その土台となる第1次産業の振興策について伺いたします。

2点目、第1次産業の担い手確保の方策について明確な答弁をお伺いたします

3点目、第1次産業に対し、マネジメントする人材の確保や組織など設置の考えはないでしょうか、お伺いたします。

4点目、鳥獣害対策として野生鳥獣肉（ジビエ）を活用する考えはないでしょうか、お伺いたします。

次に、人材育成についての1点目、平成24年第3回定例会で人材育成基本方針の策定について、一般質問を行ったが、その後検討をしたのでしょうか。検討したならば、どのようなになっているのかお伺いたします。

2点目、平成25年第2回定例会の一般質問で町長が提唱する5S運動の展開について質問しましたが、実効性についてどのように検証しているのか、お伺いたします。

3点目、職員の労務（勤務時間）管理と健康管理について同様に質問し、労務管理については「個別的な指導をしていく」と述べていますが、その後の進展が見られていないのではないかと思います。過大な事業の実施を職員に強いているのか。あるいは職員の配置が適正になされているのか、お伺いたします。

次に、特別職（副町長等）の選任についての1点目、松崎町政史上、初めて外部（静岡県

職員）から副町長を起用しましたが、当町では、全国的に例外なく典型的な過疎化の波がハイスピードで進行しています。人口減のみならず自治体の存続が危ぶまれ、町が消滅してしまうのではないかとこの危機感が迫っている中、副町長に期待することは何でしょうか、お伺いいたします。

平成26年4月1日現在の当町の人口は7387人、世帯数は3053戸であります。町長、副町長はこの数字をどのように捉え、どのように感じているのでしょうか、お伺いいたします。

また、平成26年度松崎町一般会計予算約35億円、特別会計9会計で約28億円、合計10会計で約63億円であります。町のトップ、リーダーとして、責任あるまちづくりのため町長は、副町長に対して、どのような特命事項を与えたのでしょうか。副町長の任期中まちづくりのためにやってもらわなければならない特命事項は何でしょうか、お伺いします。

2点目、西伊豆町では、教育長（教育委員）も同様に外部（静岡県職員）からの起用であります。当町の教育長（教育委員）の任期は、本年9月30日となっておりますが、教育委員（教育長）の選任についてはどのように考えているのでしょうか、お伺いいたします。

以上、壇上からの質問を終わります。

（町長 齋藤文彦君 登壇）

○町長（齋藤文彦君） 福本栄一郎議員の一般質問にお答えします。

1. 第1次産業の振興について。

①『町長は「第1次産業を土台としたグリーンツーリズムの推進」と述べているが、その土台となる第1次産業の振興策について伺います』についてです。

農林水産業・農山漁村を取り巻く状況は、従事者の高齢化や担い手の減少など厳しさを増しているところです。国においても、こうした状況を克服しようと、農山漁村の持つ潜在力を十分に引き出すことにより、農業・農村全体の所得を今後10年間で倍増させることを目指し、国全体の成長に結びつけるとともに、美しく伝統ある農山漁村を将来にわたって継承するとしております。

また、成長産業化のためには、市場を意識し、消費者の需要に応じて農林水産物を生産・供給する発想が不可欠であり、多様な人材を活用し、農商工連携による、あるいは事業の多角化による6次産業化を進めるとしており、支援策を打ち出しているところです。

町といたしましても、こうした動きに注視しながら、経営感覚を持ち、自らの判断で消費者ニーズの変化等に対応する「チャレンジする農林水産業経営者」が活躍できるよう県や関係機関と連携し、環境整備を図っていく所存でございます

②「第1次産業の担い手確保の方策について伺います」についてです。

農業分野においては、国の青年就農給付金や町の農業後継者対策奨励金により新規就農者を確保すべく支援策を講じているところですが、いずれにしましても就業後の所得の向上、経営の安定化が必要であり、民宿等観光産業との兼業もありますが、儲かる1次産業、儲けにつながる1次産業であることが重要と考えます。

先ほどの6次産業化にも通じるところですが、経営感覚豊かな経営体が多くなるよう、チャレンジする人を後押ししていきたいと考えます。また、それらに必要な生産基盤の整備につきましても地域や関係機関と協議して進めてまいりたいと思います。

③「第1次産業に対し、マネジメントする人材の確保や組織など設置の考えについて伺います」についてであります。

こちらキーワードは、6次産業化と考えます。農林水産物の付加価値向上を図る必要があり、他業種で蓄積された技術・知見の活用や新たな品種や技術の開発・普及、また、生産・流通システムの高度化など専門的知識を必要とすることが考えられます。

県では6次産業化に対する相談窓口を設けており、専門アドバイザーの派遣もしております。町といたしましてもこうした事業を活用して支援してまいりたいと思います。

④「鳥獣害対策として野生鳥獣肉（ジビエ）活用の考えについて伺います」についてであります。

平成25年度における有害鳥獣の捕獲数は、サル12頭、イノシシ75頭、シカ25頭であり、平成25年度から駆除報償金を拡充したことも影響しているかと思いますが、前年度に比べ大きく増加しています。

また、伊豆地域全体で2万頭が生息していると推定されるニホンジカについては、県において、個体数削減を優先目標とした管理捕獲が行われており、昨年度も伊豆地域全体で約2800頭が捕獲されています。

伊豆市においては、捕獲されたシカ、イノシシを有効利用しようと全国的にも珍しい公設・公営で食肉加工センターを設置していることは承知しているところですが、現在のところ、当町において設置は考えておりません。

2. 人材育成について。

①「平成24年第3回定例会で人材育成基本方針の策定について、一般質問を行ったがその後検討をしたのか。検討したならばどのようなになっているのか伺います」についてです。

平成24年第3回定例会での回答は、各種研修に参加することにより人材育成を図っていく

との回答をしたと思いますが、その後、第5次総合計画策定にあたりまして、主な取り組みのなかに「職員の資質向上」を掲げました。

内容は、広域研修をはじめとする県市町合同研修に加え、外部講師を招いた独自研修や、専門知識取得のための研修などを行うほか、人事考課制度の活用も含めて、職員の意識改革と資質向上を図るというものです。

これは、総合計画の重点プロジェクトでもある「光り輝く人づくり」に含まれるものであり、人材育成の基本方針と言っていいものと考えます。

しかしながら、研修に参加すれば育成できるというものではありませんので、町の将来像を見つめ、協働によるまちづくりを推進する意識が、高まるような環境づくりに努めているところです。

②「平成25年第2回定例会の一般質問で町長が提唱する5 S運動の展開について質問したが、実効性についてどのように検証しているのか伺います」についてです。

5 S運動は、信頼される職員となるための基本事項として、職員一人ひとりが、初心に帰って業務に臨む姿勢を確認できるよう定めたもので、自立的・自発的な行動を促進し、働きやすい職場環境づくりにつながることを目指しています。

この運動は、自己啓発として各自が日常の取り組みとして心がけるものであり、日ごろのOJTのなかで、上司や先輩から学び、また同僚と指摘し合うなかで気付き定着していくものと思います。

よって数値的な指標で示したり、比較する性格のものではないと考えますが、人事考課の際に実施している個人面談においても、話題となるケースもありますので、欠落している項目がある場合は、この辺でチェックできるものと考えています。

③『職員の労務（勤務時間）管理と健康管理について同様に質問し、労務管理については「個別的な指導をしていく」と述べているが、その後の進展が見られていないのではないかと思います。過大な事業の実施を職員に強いているのか。あるいは職員の配置が適正になされているのか伺います』についてであります。

職員の労務管理につきましては、かねてより時間外労働の解消に努めてまいりましたが、なかなか減らないというのが現状でございます。新規事業の始まりなどによる事業量の増や、人事異動に伴う新業務への習熟度不足など、原因にはさまざまな事が考えられますが、この状態が恒常化することは健康面や精神面にも影響を及ぼし、職場環境の悪化にもつながります。各課ごとに話し合いを行い、事業配分や進め方など、業務改善を図っているところ

ですが、これからも継続して取り組みたいと考えております。

集中改革プランにより、職員削減や事務事業の見直しを行い、経常経費削減には一定の成果は出ましたが、反面、職員への負担増という面もありますので、事業内容を精査し、効率化を考えるとともに、職員の配置等も検討していきたいと思っております。

2. 特別職（副町長等）の選任について。

①「松崎町政史上、初めて外部（静岡県職員）から副町長を起用したが、当町では、全国的に例外なく典型的な過疎化の波がハイスピードで進行している。そんな中、副町長に期待することは。また、副町長に対しての特命事項は何か伺います」についてです。

地方分権や権限移譲が進み、基礎自治体が担う役割が大きくなってきていますが、これからもこの流れは変わらないと思われます。こうした中で、当町のような小規模自治体では、人材面や財政面で十分な対応ができず、住民サービスが滞る場合も考えられることから、県の人的資源を得て行政力を高め、県と一体となって住民サービスの向上を図る必要があると判断し、今回の人事となりました。

副町長には、今までの経歴を生かした農業関連事業の推進などはもとより、県との連携強化、外から見た松崎町の魅力を磨く取組など、新しい風を吹かせていただくよう期待しています。

①「西伊豆町では、教育長（教育委員）も同様に外部（静岡県職員）からの起用である。当町の教育長（教育委員）の任期は、本年9月30日となっているが、教育委員（教育長）の選任についてはどのように考えているのか伺います」についてです。

教育委員の選任につきましては、今までも、教育において中立公正である方々を、皆様の同意を得て任命してきているところです。次の選任にあたりましても、この考えを変えることなく、松崎の教育をけん引していただける方を選任していきたいと考えております。

以上です。

○2番（福本栄一郎君） 一問一答でお願いします。

○議長（稲葉昭宏君） 許可します。

○2番（福本栄一郎君） では、順を追って……。県から来ました副町長さんにまず、先ほど町長の関係で、農業の専門ということで言われたんですけど、ここから第1次産業の関係で伺いたいですけれども、その前に、この伊豆新聞の記事ですけれども、「この人」という欄ですけれども、これをちょっと朗読しますと、「松崎町のこれからについて、土木的なアプローチでまちづくりの空間デザインを考えることも試みたい」と「それが町の個性にもな

っていく」ということですけれども、まず、1点、この空間デザインということは何でしょうか、教えていただけませんか。まず、1点お願いします。

○副町長（佐藤 光君） 私も、これまで県の職員といたしまして、地域づくりにいろんな形で参画させていただいております。そういった中で、空間デザインの私なりの考え方と申しますのは、一つは、景観的な、景観づくりの視点でございます。

景観づくりの視点としまして、私がいつも思っておりますのは、素材と形状、形ですね。デザイン。あとは、色彩、これによって景観が形づくられているというふうに私は理解しております。

そういった中で、午前中、藤井議員の方から、「わび・さび」ということで、町の形容をしていただきましたけれども、私は、その「わび・さび」が非常に情緒を醸し出している町だなというふうに思っています。そういったものが、景観的な素材であったり、形状であったり、色彩のなかから空間デザインという形で、形づくられているのかなと思っています。

ところが、最近、先日もそうだったんですが、大事な松崎町の宝でもありますなまこ壁の蔵が一つ取り壊されまして、静岡新聞等でも報道されたところでございます。そういったものを維持していくということも非常に大事だと思いますし、ある意味、一つには、蔵をつくっていただく皆さんも、まだ活動を若干いま休止しているかもしれませんが、蔵づくりのそういった市民活動もございますので、そういったもので、できれば新たに創出する部分も期待ができるのではないかなというようにも思っております。

そういった意味で、新しいものを作るばかりでございませぬし、保存する部分もあるわけですが、そういったものを淘汰しまして空間デザインという形で表現をしてございます。

これは、元々私が好きであります民俗学者の柳宗悦が「用の美」を申しております。用の美と、使いながら美しさを持っているというような理解を私はしておりまして、まさしく松崎町にいま存在する伝統的な景観である蔵などは、使ってこそ・・・、町の公社でもいろいろ管理しておりますが、ああいう形で使っているからこそ、その美しさが保たれているというふうに思っておりますので、そういった「用の美」をこの中でもデザインとして創出をしたり、保存していきたいなというふうな思いを込めまして、空間デザインという言葉を使わせていただいております。

○2番（福本栄一郎君） 町長にお伺いします。第1次産業の振興について、町長は、「第1次産業を土台としたグリーンツーリズムの推進」と述べている中で、環境整備を図ってい

くということですがけれども、この環境整備というのはどういうことでしょうか。6次産業化へと結びつけていく、所得が10年間で倍増、これは理想論です。その辺のこの2枚目の担い手確保の関係も絡めて聞きます。その辺の町長の考え方をお伺いします。

○町長（齋藤文彦君） 私は、松崎町が元気になるには、第1次産業が、土台がちゃんとしていなければいかんと思って、その上に観光が乗っからなければ、松崎の観光としてのこれからの将来はないなと思っているわけです。

それで、松崎の農業を考えますと、やっぱり一番考えられるのは、さくら葉の生産で日本全国70パーセント以上を松崎町が占めているということがあるわけですがけれども、これをうまく元気づけていかなければ、松崎は元気にならないと思っているところでございます。

それで、今いろんな方が松崎のさくら葉の生産をする方を集めて、生産組合等を作り上げてやっていこうという機運がありますけれども、こういうことをうまく町の方で援助、助けるようなことができれば、松崎町はそれなりの形ができてくるのではないかと私は思っているところでございます。

○2番（福本栄一郎君） 町長の、いわゆる松崎の特産、さくらの葉っぱは全国シェア70パーセント以上ということは、よく新聞記事なんかで出ています。その中で、さくらの葉っぱはいいですよ。それはいま外国から押されている。大島桜よりもむしろ外国の製品に押されている。じゃあ、松崎の若者がさくらの葉っぱで・・・、これは季節的ですよ。春から夏にかけて、秋から冬は・・・、1年間長いですよ。1年やっていけるかどうか。暮らしていけるかどうか。

後で聞きますけれども、静岡県が、都会へと行くのは、全国第2位ですよ。流出、静岡県は8000何某ですか、後で言いますけれども。なぜ行くか。働き場所がないから。

今月の広報まつぎき、家にたまに回覧板が回ってきますよ。本当に典型的な田舎ですから。

戸籍だよりで「おくやみ申し上げます（死亡）」が10名、届け出をしていない人が1名いますから11名。出生した子どもが0人ですよ。4月届け出分で。どういうことですか、これは。

だから、さくらの葉っぱじゃなくて、町長が、もう一歩も二歩も踏み込んで、ほかに、秋から冬にかけての仕事は何かということを創出してやらなければ・・・。

先ほど副町長さんのお答えの中でも、空間デザイン的なものもいいです。それで、なおかつ農業の・・・、専門家だと先ほど町長が答弁していますけれども、松崎町はいま休耕田、休

耕畑がいっぱいあるじゃないですか。今は草だらけ。なぜかという、誰もやり手がいない。

里山の資源を無駄に、見捨てているわけじゃないですか。日本地図を二つに折れば、北海道、沖縄があれば、半分が松崎町じゃないですか。

こんなに気候が温暖で、人も住みやすい、まだあるんです。北海道、東北、いわゆる山村豪雪地帯は、見たとおり、一年の半分は仕事ができない。だから、都会へとその場だけ来ると・・・。松崎町は一年中いるじゃないですか。

それを、なぜ空いている田んぼ・畑を町として一步も二歩も踏み込んで、松崎の定住人口増を図ると同時に・・・、子どもが4月ゼロ・・・、何と思うんですか。

町長は、一般会計で35億円ですか、特別会計を入れると全部で63億円ですか、これを担っているんじゃないですか。その考え方をもう一度お聞かせくれませんか。

○町長（齋藤文彦君） 若い人たちが働ける場所をそう簡単に創出できないので苦労しているわけですがけれども、先ほど申したとおり、1年は12カ月あるわけで、さくら葉もあるし、いまいろいろ休耕田等を利用して桑の葉をやっています。そして、ヨモギもやっています。アロエもやっています。そして、お米もやっています。

一年間を通して、若い人たちが生活できるようにできないかというようなことをいろいろ話し合っているわけですがけれども、福本議員の言うように、なかなか進展が遅いということもありまして、なかなか進まないというところはございますけれど、こういうことを短兵急にできないわけで、地道に少しずつ進めていくしかないのかなと思っています。

それで、地域おこし協力隊の方が、今年は2人来ましたけれども、中でいろいろ話し合っていますと、松崎町はそれなりの働き甲斐があつて、3年後は松崎町に住んで何かやりたいと。お前たちは3年後に松崎町でなにか稼ぐような算段を考えてくれというようなことを言っているわけですがけれども、松崎町はそれなりの、やればできることがあると思うんですがけれども、それを的確に若い人たちに提供できないというのが非常に厳しいところがあるわけですがけれども、そのようなことを地道にやっていくことが必要なことだと思って、副町長ともどもそれなりのことを考えてやっていきたいなと思っています。

○2番（福本栄一郎君） 地域おこし隊が、新聞に出ましたよね。有馬さんと野口さんですか、広報6月号には2人が何ですか、石部の棚田、それで、美しい里山・・・、そうじゃなくて、平たく言うと、こういうことはいいんです。いわゆる若者が飯を食える仕事を、町がどうでしょうか。それを、定住化に結び付けたらどうでしょうかということです。

いいですよ。観光的な考え方も結構です。いいです。結婚して、子どもができれば、町民じゃないですか。人口が増えてくる。その仕事を町長がトップ、リーダーとして考えているのでしょうかということです。もう一度お伺いいたします。

○町長（齋藤文彦君） だから、先ほども申したとおり、観光業も第1次産業である農林漁業がしっかりしないと、観光地としての魅力がないということは言っているわけで、それをなかなかそう簡単に、ほかの市町もいろいろ人口減少で悩んでいるわけですが、そう簡単になかなか皆さんが集まるようなことができないのが、非常につらいところがあるわけですが、そのようなことを地道にやっていこうかなと思っているところでございます。

○2番（福本栄一郎君） 地域おこしで書いてありますじゃ。有馬さんと野口さんは、農業支援やまちづくりなど、地域活性化に向けた活動に取り組むと書いてあります。なおかつ有馬さんは、松崎町が終のすみかになるよう地域おこしに力を尽くしたい。これはいいですよ。松崎がだんだん上向いてくれば。けども、これはゆっくりじゃ困るんですよ。もう今年度が始まって2カ月、だから、もうゆっくりじゃなくて、もう今日でも明日でも取り組んで、若者に向けてやらなければ、町から発信してやらなければ。もうこれはゆっくりできないです。もう時間がないですよ。

しかも、2040年には、松崎町が、人口移動が終息しない限り4100人くらいになってくる。もうゆっくりなんて、考える時間はないです。既に町長は2期目でしょう。ですから、もう5年目に入っているわけです。また次の町長が出ればまた別でしょうけれども、もうすでに5年目に入っているんですから、その辺をどうするんですか。この第1次産業は基本ですよ。これは。世界各国、いわゆる農林水産業、これは基本です。6次産業なんかは別にいいんですよ。1+2+3は6、1×2×3は6次産業になっていますけれども、この1次産業がなければ、2次も3次も起きてこない。はっきり言うと、食糧の確保、それと同時に、換金して生活の糧ですよ、農業。

今さら都会から工場をつくってくれ、なにをつくってくれはできないです。だから、地元のここの資産があるんです。土地が。その辺の若者が乗っかるような政策を今でも今日でも明日でも考えないと、どうしようもなくなりますよ。その辺はどうでしょうか。もしあれだったら、副町長さん、どうでしょうか。専門的な考えとしまして、お願いします。

○副町長（佐藤 光君） ただいま福本議員がおっしゃるとおりでございまして、やはり6次産業の前には、実は、1次産業が一番数値としては小さいですが、一番の基本なんです

ね。ですので、1次産業をどういうふう生産体制として確保していくかということだと思います。

その時に、私は、特徴的に松崎を見てみますと、やはり決して都市ではないですけども、都市的な農業の特徴を有しているんじゃないかなと思います。

都市的な農業というのは、どういうことかと申しますと、都市近郊で消費者の近いところで、小規模であっても割と付加価値の高い農産物を作っているということをイメージしていただくとうろしいかと思うんですけども、松崎町には、幸い観光という形で、多くの観光客の皆様がいらっしゃいますので、そういった方々を消費者と捉えれば、そういった方に直接都市と同じような形で地場産の農産物が提供できますので、少量であっても、多品種の農産物等を、あるいは付加価値を付けた農産物等を供給することによって、当然流通マージンなんかもかかりませんので、そういった中で、一つの生業としての農業を展開するという可能性は非常に占めているのではないかなと思います。

特に、こういった気候的にも比較的恵まれておりますので、高付加価値の有機農法等非常にいま消費者の皆さんが求めていらっしゃるような安心・安全な農産物をですね。朝採れたものを松崎町では夕食に新鮮なまま、あるいはお昼のランチでもいいですけど、新鮮なまま提供しますよというような形で、文字通りの地産地消的なことをしながら、農業を底上げしていくということが一つありますし、そういった農業を振興することによって、そういったものを更に付加価値を付けて、加工するなりして、商品化をすることによって、そこに雇用を創出していったらどうだろうというようなことを考えてございます。

○町長（齋藤文彦君）　いま副町長が言ったとおり、若い人に稼げる農業というのを目の前に見せなければ、なかなか若者も引き続いて来ないと思うわけですけど、それが松崎町は一番てっとり早いというのが、ぼくはさくら葉だなと思って、いろいろやっているわけでございます。

また、福本議員は、農業政策にいろいろ詳しいものですから、「こうすれば若者が残るよ」と、「こうすれば絶対いいよ」というような提言があったら、ぜひ私の方にも教えていただきたいなと思っているところでございます。

○2番（福本栄一郎君）　町長。時間がなくなりますけれども、川勝静岡県知事が、静岡市葵区追手町軍団、町長は齋藤分団、宮内分団ですけども、知事のこれを読みますと、ふじのくにの理想郷、平成26年度一般会計予算が1兆1800億円ですね。「特に力点を置いたのは、人材育成と雇用の創出に係る新成長産業の育成だと強調したという」これは新聞記事で

す。

その中で、8つの重点の中では、新成長産業の育成と雇用創造、新規事業として、これは、農地中間管理機構体制整備費5億6800万円ほど予算計上している。これが、だから、松崎町で・・・、もっとも別途農業委員会がありますけれども、行政機関として。予算を握っている町長の考え方。農業委員会は残念ながら、予算は握っていませんので、町長が農林水産の金を握っていますから、町長ですけれども、いわゆる休耕田の解消と同時に人口を増やす方策として、若者が魅力を感じて、ある面では安定的に収入を得ましょう。こういった考え方をやったらどうでしょうかということです。

それから、一つの例ですけれども、例えば、山口県、里山再生で県庁職員有志で中山間応援隊を結成したと。いろんな草刈りとか、水路の整備とかということです。こういった考え方というのはないですか。例えばですよ。役場の職員とか、そういったことも、応援隊というのを作ることにはできるんですか。いわゆる高齢者のお助け隊、その辺の考え方はどうでしょうか。

○副町長（佐藤 光君） いろんな意味で、今の社会の中に公務員といいますか、役場の職員が入りこむケースも非常に多くなっておりますので、ある意味、地域の中で本当に地域おこしの発想として、地域の皆さんと一緒にやろうという皆さんも非常にいらっしゃいます。

そういう中で、いろんな地域的な課題、きめ細かな課題を吸収するということもできるかと思いますので、ぜひともそういう地域の中に入り込んでいくという機会も今後検討してまいりたいと思います。

○2番（福本栄一郎君） その辺をぜひとも積極的に、もう待ったが効かないんです。腕を組んで「明日やろうじゃ」ったらいいんですよ。高度成長経済の時には。今は全然だめでしょう。もう待ったが効かないんです。

ですから、もう取り急いで、その方策を、副町長さんが専門家と先ほどおっしゃいましたので、その辺はまた副町長さんもまちづくりの・・・、若者の働ける場所、イコール人口の定住を図るための方策をお願いしたいと思います。

それから、次に、人材育成ですけれども、これはそれぞれ私の方で、一般質問で過去にやっていますけれども、ここを通りましても、夜の10時、11時頃まで電気が点いています。日曜日は、私は、夜は通らない。昼間は見るけれども、昼間は明るいですから、電気は点いていない。点いている時もありますけれど、特に夜です。夜10時、11時まで点いている。い

わゆる職員の健康管理、この辺の考え方。

通常のいま平常時で、夜の10時、11時・・・、まあ、12時とまでは言いませんけれども、じゃあ、災害が起きたときには、どうするんですか。

ですから、町長は、無理な仕事を職員に、「あれもやれ、これもやれ」と強いているのか、強制しているのか、あるいは職員の数が足りないのか、それとも適正な・・・、やっぱり人間ですから、それは適性もあると思います。好きな仕事もあるし、嫌いな仕事もあると思うんです。人間ですから。その辺を、人事異動にあたって、良く考えているのか。

それと同時に、例えば、1週間、5日間の中でも今日は残業をやめましょうという「ノー残業デー」、職員は要するに、町の宝なんですよ。

何か災害が起きますと、集まってくるのは、頼ってくるのは、役場しかないです。親戚とか兄弟がいれば別ですけども、我われは子どももよそへ行っちゃっている。誰も親戚がいなかったら、頼るところは役場ではないですか。役場の職員に頼るしかないんじゃないですか。それを仕事で体を壊しました・・・、実際、東北地方の東北大震災でかなり体を壊している人がいるじゃないですか、市町村職員で。もちろん未曾有の大災害ですからあれですけども、平常時において夜の11時、12時近くまで電気が点いているのはどういうことですか。

前に町長に言いましたけれども、町長は夜職員を見回ったことがあるんですか。その辺をお願いします。

○町長（齋藤文彦君） 私は、いろいろ各市町の役場等を結構見えていますよ。ただ、私は、アフター5で、5時に終わったら帰って、本当は家族サービス、そして、ボランティアとか、その地域の行事等に参加するように言っているわけですけども、なかなかやっぱり何といいですか、県の方から仕事が下りてくるのが多いのか、なかなか残業等が止まないの、非常に苦慮しているところです。ただ、集中改革プランで、非常に職員の人数が減ったということがありまして、ちょっと言いますけれども、平成10年4月には118人いたのが、今は89人、私の直属の部下は60人というような中で一生懸命やっているわけですけども、ただ、職員が一生懸命仕事をやっているのに、「お前、仕事をやめろよ」とはなかなか言えないわけで、総務課長の方でいろいろ「ノー残業デー」とかいろいろやっていますけれども、なかなかその辺がうまくいかないのが・・・、厳しいなと思っているところです。ただ、本当に役場の職員は松崎のために役立つ人が働いているところが松崎町役場ということで、5S運動をやっているわけですけども、そのようなことを考えて、松崎の宝だと思ってい

ますので、それなりに長持ちしてもらいたいなと思っていますので、そのようなことを考えて、今やっているところでございます。

○総務課長（山本秀樹君）　ちょっと補足をさせていただきます。いま町長の答弁にもあったとおり、人数的には、例えば、改革を始めてから約2割の人間が減っているわけです。ただ、仕事につきましては、権限移譲等また新しい仕事ができるとか、制度ができるとかということで仕事の量は増えているということからみれば、1人にかかってくる仕事の量というのは増えてきているというのが現状でございます。

人間が約2割減ると、平成17年当時から24年を比べると、だいたい給与分で1億1500万円くらいの減額にはなっているわけですが、そういう経済的な効果がある半面、職員の方の負担は増えているというような状況がありますので、その辺については、いろんな関係で負担にならないような方策を今後考えていきたいと思います。

ただ、職員の方は、夜残ってまでもやっぱり仕事を終わらせなきゃと・・・、それはどうしてかといえば、ひいては住民の利益に繋がるということで、みんな頑張っていますので、その辺はできるだけそういう残業は少なくしたいと思いますが、職員の頑張りの方もご理解をいただきたいと思います。

○2番（福本栄一郎君）　「ノー残業デー」を設けるということは回答がないですけども、厚生労働省から過重労働による健康障害を防止するために事業者が講ずべき措置が出されてということは知っているでしょう。ですから、人間ですから、機械じゃないんですよ。マシンじゃないです。人間、生身です。あんまり過重でやると、職員が倒れたらどうするんですか。

だから、町長は、仕事を「あれもやれ、これもやれ」と言っているんじゃないのかなと私は推測する。あるいは人数が足りないのか・・・、先ほど総務課長が答弁したんですけども・・・、あるいは適正な・・・、異動だって本人のあれを聞かないでしょう。自分は何に向いているか、人間ですから、私だって適性はありますよ。いやな仕事、やってみたい仕事だってあります。その辺を職員の異動のときに聞いていないでしょう。

ですから、だらだらじゃなくて、節目節目でやるように、ですから、町長が、出張の帰りでもいいですよ。夜着いたならば、見回って・・・、励ましの言葉もいいですよ。役場の職員を。

町長は言っているでしょう。「信頼関係、職員のコンプライアンスを高め、役場は町民の役に立つ人が働いている場所と言われるように、全身全霊を傾注してまい進していく所存で

あります」と言っているでしょう。

ですから、町の人、「なんだろう。役場は不夜城だ」と、それしか見ていないんです。ですから、「ノー残業デー」を使って、職員の体を大事にしてやらなければ困るでしょう。この皆さん、課長さんたちが、もしぶっ倒れたらどうしますか。奥さん、子どもは泣くじゃないですか。若者はそうなんです。

だから、その辺を、今度は副町長に聞きますけれども、副町長は近くに住んでいますけれども、ときたま見回るような考え方はないですか。「ノー残業デー」を作る考え方はないでしょうか、その辺をお願いします。

○町長（齋藤文彦君） 「ノー残業デー」はもうやっていますよ、はじめから。スタートしています。

○総務課長（山本秀樹君） 過去にも何度か「ノー残業デー」というのはやりましたけれども、それがだんだん途中でついでたりということもありまして、なかなか制度が確立されていなかったわけですが、この4月から第1金曜日は「ノー残業デー」というような形で進めています。

○町長（齋藤文彦君） なんか私が職員に対して非常に冷たいような感じに受けるわけですが、私は、毎朝8時10分にラジオ体操をやって、全庁を見回って、「皆さん、おはようございます」と回ってくるわけですね。出張に行って帰って来た時には、私は、ちゃんと見回りますよ。私が一番かわいがっているんじゃないですか、職員を。私の部下ですよ。それで、変なことを言われると、ちょっとうまくないと思うので・・・。

○2番（福本栄一郎君） 時間延長をお願いします。

○議長（稲葉昭宏君） 5分延長を許可します。

○2番（福本栄一郎君） じゃあ、たまたま私が見なかったのなか。「ノー残業デー」はあるわけですね。そうはいつでも、点いている時がありますね。

だから、私が言うのは、この平常時において、台風とか地震がきたらどうするんですかということです。この時には家にも帰れないんじゃないですか。今でさえ、平常時で、夜11時、12時まで電気が点いていたらどうなるんですか。

なんか、1年365日では足りないから、1日50時間くらいにした方がいいと思いますよ。まあ、それは別としても・・・。だから、監督して、職員の体をやってください。わかりました。

次に、副町長さんが横にいますけれども、人材、財政、県と一体となってやりますと町

長は答弁していますけれども、副町長に対しまして、何か特命事項を与えたんですか、もう一度聞きます。

○町長（齋藤文彦君） 特命事項というのはありませんけれども、副町長は、農業等に非常に詳しいわけですから、第1次産業を活性化して、松崎を活性化して欲しいなというところでございます。

○副町長（佐藤 光君） 私本人といたしましては、昨年10月に「日本で最も美しい村」連合に松崎町が加盟をいたしました。そういったまちづくりのいわゆる日本にデビューしたということで、私は理解しておりますけれども、そういったもののブランド価値をやはり高めていくような取り組みを、町職員の皆さんと一緒にやっていきたいなと思います。

ブランド力は、私が個人的に思うのは、信用力と知名度だと思うんですね。かなり訪れて来ていただいている皆さんにとっては、信用力は高まっていると思います。非常に来ていただいたお客様にとっては、「松崎町っていいところだね」というふうに思っていると思います。

残念ながら、まだまだ知名度という意味でもう少し頑張らなければならない部分があるのかなというふうに思いますので、そういった意味では、「日本で最も美しい村」連合に加盟したということで、全国レベルになりましたので、そういった中で、知名度をアップして、いろんな産業振興あるいは町民の皆様の幸福度に繋がるようないろんな取り組みはしてまいりたいと考えております。

○2番（福本栄一郎君） 町長は、日本で一番美しい村づくり、かたや平成の花とロマンのふる里づくり、結構です。スローガン。再々私は言いますけれども、この町の銀座通り、新浜通り、電気は・・・街灯は・・・、誰一人。経済は冷え切っている。南極、北極以上に。もうマイナス50度、60度に下がっているじゃないですか。誰も歩いていないです。どうするんですか。みんなシャッター、あとは、解体して更地。かといって、更地になっても駐車場の借り手はいない。こういった状態で、あなたが言っている美しい村づくり、これはあなたの方策ですから、それはいいですけれども、この第1次産業から出発して、 $1 + 2 + 3$ は6次産業ですね。1次産業がゼロならば、 $0 \times 2 \times 3$ だったら、6次産業じゃない。これはゼロだよ。これは算数でしょう。 $0 + 2 + 3$ だったら、5次産業。1次産業がゼロになってしまえば、2を掛けても、3次産業を掛けたってゼロですよ。元も子もない。

だから、1次産業に力を入れて、松崎町の基盤づくりをやらなければいけない。松崎町は元々世界を制覇した蚕産、桑畑をいま作っているようですけれども。それから、さくらの

葉っぱ、みんな1次産業じゃないですか。あるいは畳表のリュウキュウですか。あとは、木炭ですか。この辺に力を入れてやらなければいけない。それで・・・、それはいいです。

町長が言っている・・・、副町長に対して特命を与えない。何ですか。特命を与えないようなこと・・・、やってもらわなければならないでしょう。

いいですか。これは新聞記事ですけれども、静岡県・・・、副町長さんは元は静岡県職員で、今は町の職員ですけれども、流出が全国第2位です。みんな東京、名古屋へ行ってしまふ。ワースト1が北海道、その次が静岡県、青森県じゃないですか。仕事がないから、みんなよそへ出て行く。これは松崎町もイコールです。仕事がないから、帰って来ない。

それで、次の新聞、ショッキングな・・・、日本創成会議という・・・、民間企業が発表した・・・。あとは、松崎町は2040年には人口が4500人程度、41パーセント減っていく。それで、今度は、若い女性がいなくなってしまう。どうするんですか、これは。若い女性ですよ・・・。だから、自治体が消滅していく、なくなるんですよ、松崎町が。いいんですか、これは。町長の無策じゃ・・・、だから、力を入れてやらなければいけない。だから、副町長を迎えたんでしょ、静岡県から。新しい発想のもとに。それに対して、なぜ特命事項を与えないんですか。こういったまちづくりをしてもらいたいということを・・・。時間がないですからやってください。

○町長（齋藤文彦君） 時間が残ると、最後に福本議員は自分の言いたいことを言って終わるもので、ちょっと話していききたいなと思うわけですがけれども、特命とか何とか言いますけれども、私は、副町長と話し合っていて、私は、全町まるごとふる里自然体験学校、体験を通して対価を得る。教師は町民であるということを2人で話し合っ、こういうまちづくりをしようじゃということでやっているわけですから、福本君の言うやつにちょっと当たらないと思うわけですがけれども。

○議長（稲葉昭宏君） 福本君、時間がありませんから、簡単に。

○2番（福本栄一郎君） 言いたいことじゃないんです。町長、あなたと私は同級生・・・、いいですよ。あなたと握手するわけにはいかないでしょう、この議場の中では。外に出ればいいですよ。当然こっちだって、みんな、有権者というか、町民の方から言われています。

「こういうことを言ってください」、「聞いてください」と、それで、また持ち帰って、こういうことを言いましたと、町長の答えを引っ張り出しているんです。何も答えておりませんから、そういったことのないように・・・。

同等じゃないんですよ。我われは。この10人は。町長とは同等じゃないんです。あなた

の命令権、指揮権を受けないですから。その辺ですよ。町長。時間がないですから・・・、人口が減ってくる・・・、要するに、今までの考え方、生き方、暮らし方が・・・、全然変えなければならない。

これは、やっぱりまちづくりの再検討を迫っています、今。これをどういうふうにかえるか、あなたの腕にかかっているんです。これを、町をくるめて、協働してまちづくりをしなければいけない。それじゃ、前に進めない。坐して、松崎町を育てて・・・、腕を組んで消滅を待つのか、それとも、新副町長を県から迎えて、アクティブに打って出ていくのか、あなたの手腕にかかっています。

これをもって、一般質問を終わります。

○議長（稲葉昭宏君）　以上で福本栄一郎君の一般質問を終わります。
